

こわいことを知りたくて旅にでかけた男の話

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

あるおとうさんが、ふたりのむすこをもっていました。にいさんのほうはりこうで、頭がよくて、なんでもじょうずにやってのけました。ところが、弟のほうときたら、まぬけで、なんにもわからないし、なにひとつおぼえることもできないというありさまでした。ですから、弟の顔を見るたびに、だれもかれもこういうのでした。

「こういうむすこがいたんじや、おやじさんはいつまでたつてもたいへんだなあ！」

こんなわけですから、なにかすることのあるときには、いつもきまって、にいさんがやらされました。けれども、ときには、お

そくなつてからとか、どうかすると夜中よなかなどに、なにかとつてきてくれと、おとうさんからいつかあることもあります。そんなとき、墓地ぼちとか、あるいはどこかおそろしい場所ばしょをとおつていかなければならないようなばあいには、にいさんはいつもこうこたえました。

「いやだ、いやだ、おとうさん。そんなところへはいかないよ。ぞつとする。」

なぜって、にいさんはこわくてたまらなかつたのです。また、夜など、炬ろばたで身みの毛けのよだつような話がでますと、きいているものは「うわあ、ぞつとする」と、よくいいいます。

弟はすみっこにすわつて、じぶんもその話をきいているのです

が、それがなんのことやら、さつぱり見当けんとうがつきません。

「みんな、しよつちゆう、ぞつとする、ぞつとするっていつてるが、おれはちつともぞつとなんかしやしねえ。こいつは、きつと、おれにはわからねえことなんだろう。」

さて、あるときのこと、おとうさんが弟にむかつてこんなことをいいました。

「おい、そのすみつこにひつこんでいる小僧こぞう、おまえは、もうそのとおりに大きく、がっしりした男になった。おまえもなにかひとつ、ならいおぼえて、じぶんでくつていくようにしなくちやいかん。みろ、にいさんはいつしようにけんめいやつてるのに、おまえときたら、まるではしにも棒ぼうにもかからん。」

「うん、おとうさん、おれもなにかおぼえたいよ。そうだ、もしできたら、ぞつとするつてことをおぼえたいな。そいつは、おれにはちつともわからねえもの。」

にいさんはこれをきいて、わらいだしましたが、心のなかでひそかに思いました。

（ああ、ああ、弟のやつは、なんて大ばかなんだ。あれじゃ、いっしょうかかたつて、ものになりやしなみい。三つ兎ごの魂百までつていうからなあ。）

おとうさんは、ため息いきをついていいました。

「ぞつとするか、そいつをおぼえるのもいいだろう。だがそんなことをおぼえたつて、それではくつちやいけないぞ。」

それからまもなく、お寺てらの役僧やくそうがこのうちへたずねてきました。そこでおとうさんは、じぶんの心配しんぱいを、この役僧に話して、弟むすこはなにをやらせてもだめで、なんにもわからないし、なにひとつ、ならいおぼえることもできないといたしました。

「まあ、あなた、考えてもみてください。わたしが、なにをやつてくつていくつもりだとききますとね、どうでしょう、ぞつとすることをおぼえたいなんて、とんでもないことをぬかすんですよ。」

「それだけのことなら、わたしのところでおぼえられますよ。」
と、役僧やくそうはこたえていいました。

「まあ、そのむすこさんをわたしのところへよこしてごらんなさ

い。きつと、しこんであげますよ。」

おとうさんは、あの小僧も、ちつとはしこんでもらえるかなと、考えましたので、すぐ役僧にたのむことにしました。

こういうわけで、役僧はむすこをうちにつれていきました。むすこはそこで鐘つきをすることになりました。

それから二、三日たった、ある晩のことです。ま夜中ごろ、とつぜん役僧がむすこをおこしました。そして、すぐに寢床からおきて、塔とうにのぼって、鐘かねについてこい、といいつけました。

(ぞつとするっていうのがどんなことか、きつとおぼえさせてやる。)

役僧はこう考えて、じぶんはむすこよりもひと足さきに、こつ

そりでかけました。

むすこが塔とうにのぼって、くるりとむきなおって、いざ鐘かねのつなをにぎろうとしたときです。ふと見ますと、ひびき穴あなにむかいあつた階かい段だんの上に、なにやら白いものが立っているではありませんか。

「そこにいるのはだれだ。」

と、むすこがさげびました。けれども、その白いものはうんともすんともいわず、身み動うごきひとつしません。

「へんじをしろ。」

と、むすこがまたもやどなりました。

「さもなきや、きえてうせろ。この夜中に、こんなところに用は

ないはずだ。」

けれども役僧やくそうは、若者わかものにおぼけだと思ひこませようと思つて、なおも身動きひとつせず、じつと立っていました。それを見て、若者はまたまたどなりました。

「きさま、ここぞでなにをしようつてんだ。まともな人間なら、口をきけ。さもなきや、階段からつきおとすぞ。」

しかし役僧やくそうは、なあに、口さきだけで、そんなことはできまい、と考へて、あいかかわらずだまりこくつたまま、まるで石でもできてゐるやうに、つつ立つていました。

若者わかものはもういつペンどなりつけました。しかし、それでもなんのききめありません。そこで、こんどはいきおいよくおぼけ

におどりかかって、おばけを階段かいだんからつきおとしてしまいました。おばけは十段ばかりころがりおちて、すみっこにのびたまま、うごかなくなっていました。

それから、若者は鐘かねについて、役僧のうちにかえりました。そして、なんにもいわずに、さつさと寢床ねどこにもぐりこんで、またねむってしまいました。

役僧やくそうのおかみさんは、ご主人しゅじんのかえりを長いこと待まっていました。いつまでたっても、ご主人はもどってきません。それで、とうとう心配しんぱいになって、若者をおこして、きいてみました。「あんた、うちのひとがどこにいるか知らない？ あんたよりもさきに、塔とうにのぼったんだけどね。」

「知りませんねえ。」

と、若者わかものはこたえました。

「だけど、あそこのひびき穴あなのむかいがわの階段かいだんの上に、だれだか立っていましたよ。おれがいくらよんでもへんじもしないし、おりていこうともしないから、おれはどろぼうかなんかだと思つて、つきおとしてやりましたよ。まあ、いつてごらんさい。そうすりや、坊さんぼうかどうかわかりますからね。もし坊さんだつたとすりや、気のどくなことをしたなあ。」

いわれて、おかみさんがとんでいってみますと、やつぱりご主人ゆじんです。役僧やくそうは、すみっこにへたばつて、うんうんうなつていました。むりもありません。かたつぼうの足の骨ほねがおれてしま

つたのですからね。

おかみさんは役僧をかつぎおろしますと、すぐその足で、わかも若者のおとうさんのところへどなりこみました。

「おまえさんとこのむすこはね。」

と、おかみさんはわめきたてました。

「えらいことをしでかしてくれたよ。うちのひとを階かい段だんからつきおとしてさ、おかげでうちのひとは、かたつぼうの足をおつちまっただよ。あんなろくでなしは、さっさとうちからつれてつとくれ。」

おとうさんはびつくりぎょうてんして、すぐさまとんでいって、むすこをしっかりとばしました。

「なんていえばちあたりのいたずらをするんだ。おまえは悪魔あくまにでもとつつかれたにちがいない。」

「おとうさん、まあ、きいとくれよ。」
と、むすこがいました。

「おれはちつともわるかあないんだぜ。坊ぼうさんたら、まるでわるだくみでもするやつみたいに、ま夜中よなかにそんなところにつつ立つてたんだ。おりやあ、だれだかわからねえから、三べんも注意ちゅういしてやって、口をきくなり、おりてくなりしろっていったんだもの。」

「ああ、おまえのおかげで、おれはとんでもないめにばかりあつている。おまえはどこかへいつちまってくれ。おまえの顔なんか

もう二度と見たくない。」

と、おとうさんがいいました。

「いや、おとうさん、そいつはありがたいよ。だけど、夜のあけるまで待つておくれ。夜があけたら、どこかへでかけていつて、ぞつとするつてやつをおぼえてくるよ。そうすりゃ、おれもそいつでめしをくつてくことができるつてもんだ。」

「なんでもおまえのすきなことをならうがいい。」
と、おとうさんはいいました。

「わしにとつちや、なんだつておんなじことだ。それ、この五十年ターレルをおまえにやる。これをもつて、ひろい世よのなかへでていくがいい。だが、生まれ故郷こきょうやおやじの名まえを口にするん

じゃないぞ。わしがはじをかくことになるからな。」

「わかったよ、おとうさん、だいじょうぶ、それくらいのことなら、よく気をつけてわすれねえようにするよ。」

やがて、夜があげますと、若^{わかもの}者は五十ターレルをポケットにつつこんで、大通りにでていきました。そして、歩きながら、ひつきりなしに、

「ああ、ぞつとしたいもんだ。ぞつとしたいもんだ。」
と、ひとりごとをいっていました。

そこへ、ひとりの男がやってきました。男は、若^{わかもの}者がひとり
でしゃべっていることばを耳にしました。それから、こんどは、
ふたりでしばらく歩いていきますと、むこうに首^{くび}つり台^{だい}が見えて

きました。すると、男は若者にいいました。

「おまえさん、ほら、あそこに木があるだろう。あそこで、七人の男が（一）なわ屋やのむすめと結けっこん婚したところなんだ。やつこさんたち、いまはブランブランとどぶけいこをしているのさ。おまえさん、あの下にすわって、夜まで待まっていてみな。きつと、ぞつとするつてことがおぼえられるだろうよ。」

「たつたそれつくらいのことなら——」
と、若わかもの者はこたえました。

「なんでもねえや。だが、ぞつとするつてことが、そんなにあつさりとおぼえられるんなら、このおれのもつてる五十ターレルはおまえさんにやるよ。まあ、あしたの朝、もういちどおれんこ

へきな。」

そこで若者は、首つり台のところへいき、その下にすわって、夜まで待っていました。からだはこごえそうに寒くてたまりません。そこで、若者はたき火をはじめました。けれども、ま夜中よなかごろには、風がばかにつめたくなつてきて、いくら火をたいても、ちつともあたたかくなりませんでした。風にふかれて、首つり台にぶらさがっている死しがいが、たがいにぶつつかりあつては、ユラリユラリとゆれました。それを見て、若者は、

（おれなんか、このたき火のそばにいても寒いんだ。あんな高いところにいるやつらは、さぞ寒くて、がたがたふるえているだろうなあ。）

と、思いました。

若者^{わかもの}は、もともと思いやりぶかいたちでしたので、さつそくはしごをかけて、のぼっていききました。そして、ひとりずつじゅんじゅんにつなをほどいて、七人の男をみんな下におろしてやりました。それから、火をかきたてては、プウプウふいて、からだがよくあたたまるように、みんなを火のまわりにすわらせてやりました。ところが、みんなはすわったきり、身動^{みうご}きひとつしませんでした。そのうちに、着物^{きもの}には火がついてしまいました。それを見て、若者は、

「気をつけろよ。でないで、もういちど上へぶらさげるぞ。」
と、いいました。

ところが、死人しにんは耳がきこえません。うんともすんともいわず、ぼろ着物はもえほうだいです。若者わかものはぶんぶん腹はらをたてて、いきました。

「おまえたちがじぶんで気をつける気がないんなら、たすけてやることはできねえよ。おれは、おまえたちのおつきあいやで焼やけ死しぬのはごめんだぜ。」

そこで若者は、死人どもを、またもとのようにじゅんじゅんにつるしあげました。それから、たき火のそばにすわって、ぐうぐうねこんでしまいました。

あくる朝になりますと、きのうの男がやってきて、五十ターレルをもらうつもりで、こわいいました。

「どうだい、ぞつとするってのは、どんなことだかわかったかい？」

「とんでもねえ。」

と、若者わかものはこたえていいました。

「いったい、どうしたらそいつがわかるんだろうなあ。あそこにぶらさがってるやつらは、口をききもしねえし、それに、とんでもねえあほうときてやがる。なんしろ、じぶんのきているぼろ着き物ものがもえたって、そのままほっとくんだからなあ。」

相手あいての男も、このようすでは、とてもきようは五十ターレルをもらえそうもないとみてとって、そのままいってしまいました。

けれども、

「あんなやつには、まだあつたことがない。」

と、いいました。

若者わかものもふたたび歩きだしましたが、またまた、

「ああ、なんとかしてぞつとしたいもんだなあ。ああ、ぞつとしたいもんだ。」

と、ひとりごとをいいはじめました。これを、若者のうしろから荷馬車にばしやをひっぱってきた運送屋うんそうやが耳にはさみしました。そして、

「おめえさんはだれだい。」

と、たずねました。

「知らねえよ。」

と、若者わかものはこたえました。

「おめえさん、生まれはどこだい。」

と、運送屋うんそうやがなおもたずねました。

「知らねえよ。」

「おやじさんは、なんてんだ。」

「そいつあいえねえよ。」

「おめえさん、なにをしようちゆうぶつぶついつてんだ。」

「うん、そいつなんだ。」

と、若者わかものはこたえていいました。

「おれは、ぞつとするつてことをおぼえてみてえんだが、だれもおしえてくれねえんだ。」

「ばかなことをぬかすなよ。」

と、運送屋うんそうやがいました。

「さあ、おれといっしょにきな。どつか、いいところへ世話せわしてやるぜ。」

そこで、若者は運送屋といっしょに歩いていきました。日がく
れてから、ふたりはとある宿屋やどやにつきました。ふたりはここにと
まることにしました。若者は、へやへはいろいろとして、またもや
大声で、

「ああ、ぞつとしたいもんだ。ぞつとしたいもんだ。」
と、いいました。

宿屋やどやの主人しゅじんはそれをきいて、わらいながらいいました。

「そんなことがおのぞみなら、ここにやおあつらえむきのことが

ありますよ。」

「まあ、だまつといでよ。」

と、そばから宿屋のおかみさんが口をだしました。

「いままでだって、ものずきな人たちがずいぶんおおぜい、命をいのちうしなつてしまつたんじゃないか。こんなきれいな目が、二度と日のめをおがめないようにでもなつたら、それこそかわいそうだよ。」

ところが、若者わかものはいいました。

「どんなにむずかしいことでも、おれはおぼえてみたいんだ。そのために、こうして旅たびにでかけてきたんだから。」

若者はなおも主人に、話してくれとせがみました。それで、と

うとう主人は、ここからあまり遠くないところに魔法まほうにかけられているお城しろがあつて、そこで三日三晩みつかみばん、寝ずの番ねばんをすれば、ぞつとするというのがどんなことだかわかるでしょう、といいました。そして、さらに話をつづけて、寝ずの番をするだけの勇氣ゆうきのあるものには、王さまがごじぶんのお姫さまひめをおよめにくださるといふのです。ところが、そのお姫さまというのが、おてんとさまのてらすこの世界せかいで、いちばん美しいかたなのです。それから、おしろ城しろのなかにはたくさんの宝たからものもあつて、それを悪魔あくまどもが番ばんをねしています。けれども、うまく寝ずの番ばんをやりとおせば、その宝たからものも手にはいつて、貧乏人びんぼうにんでもたちまち大金持おおかねもちになれるのです。いままでにもずいぶんおおぜいの人たちがお城しろにはいつ

ていきましたが、まだひとりとしてかえって来たものはありません、と話してきかせました。

若者わかものは、あくる朝、さつそく王さまのまえにいつて、

「もしおゆるしくださいますなら、わたくしはその魔法まほうのかけら
れているお城で、三日三晩みっかみばん、寝ずねの番ばんをいたしとうございます。」
と、もうしました。

王さまは若者をじつと見つめていましたが、若者が気にいりましたので、こういいました。

「おまえは、なんなりと三つのものをねがいでるがよい。それらのものを城しろのなかにもちこむことをゆるす。だが、生きものであつてはならぬぞ。」

いわれて、若者わかものはこたえました。

「それでは、火と、旋盤せんばんと、それから小刀こがたなのついた細工台さいくだいをおねがいます。」

王さまは、昼まのうちに、それらのものをのこらずお城のなかにはこびこませておきました。さて、日のくれかかったころ、若者はお城にでかけていきました。そして、なかのひと間まにはいりこんで、火をかんかんおこし、小刀こがたなのついた細工台さいくだいをそばにおいて、じぶんは旋盤せんばんの上うへにこしをおろしました。

「ああ、ぞつとしたいもんだなあ。だが、ここでもやつぱりだめだろう。」

と、若者わかものはいいました。

ま夜中よなかごろ、若者はもういちど火をかきたてようと思いましたが、
そして、火をプウプウふいていますと、だしぬけにすみっこのほ
うから、

「ウウ、ニヤオ。おれたちや寒くてたまらん。」
と、さけんだものがありました。

「ばかだな、おまえたちは。」
と、若者がどなりました。

「なにをいってんだ。寒かったら、ここへでてきて、火にあたつ
て、あつたまつたらいいじゃねえか。」

若者わかものがこういいおわたとたん、大きな黒ネコが、ものすご
いいきおいで、とびだしてきました。そして、若者の両わきにす

わったかと思うと、火のような目玉をぎらぎらさせて、若者の顔をぎゅつとにらみつけました。

しばらくして、からだがあたたまってきますと、そのネコどもが、

「おい、きょうだい、トランプをやらないか。」
と、さそいかけました。

「やらなくってどうする。」
と、わかもの若者がこたえました。

「しかし、そのまえに、ちよいとおまえの足を見せてくれよ。」
こういわれて、ネコどもは足のつめをのばして見せました。

「いよう、なんて長いつめをしているんだ。ちよいと待ちまなよ。」

まず、こいつを切つてからにしなくつちや。」

若者はこういいながら、ネコの首くびつたまをつかんで、細工台さいくたいの上へのせると、四つ足をぐつとねじでしめつけてしまいました。

「おまえらの指を見たら、トランプをする気がなくなつた。」

若者はこういうがはやいか、ネコどもをたたき殺ころして、おもての水のなかへほうりこんでしまいました。

こうして、若者わかものが二ひきのネコをかたづけ、ふたたびたき火のそばにもどつて、すわろうとしたときです。とつぜん、あつちのすみからも、こつちのすみからも、もえる火のくさりにつながれた黒ネコや黒犬が、とびだしてきました。しかも、その数はあとからあとからふえるばかりです。とうとうしまいには、若者

が身動きみうごひとつすることができないほどになってしまいました。

そして、そいつらは世よにもおそろしいうなり声をあげて、若者のたき火をふみつけ、ふみにじって、その火をけそうとするのです。

そのようすを若者はしばらくのあいだじつとながめていましたが、あんまり腹はらがたちましたので、いきなり細工刀さいくがたなを手にとつて、

「とつとどうせやがれ、こんちくしょうめら。」

と、さげびながら、そいつらめがけて切つてかかりました。なかにはにげてしまったのもありましたが、のこったやつらはうちころ殺して、おもての池のなかにほうりこみました。

それから、若者わかものはたき火のそばにもどつてくると、かすかに

のこつている火種ひだねから火をふきおこして、あたたまりました。こうして、すわっているうちに、たまらないほどねむくなつてきて、もうどうにも目をあいてることができなくなりました。そこで、あたりを見まわしますと、かたすみに大きなベッドがありました。「こいつはちようどいいや。」

若者はこういいながら、そのベッドのなかにもぐりこみました。ところが、目をつぶろうとしたとたん、ベッドがひとりでにうごきだして、お城しろじゆうをぐるぐるまわりはじめました。

「うまいぞ、うまいぞ、もつと走れ、もつと走れ。」
と、若者わかものがいました。

するとベッドは、まるで六頭とうの馬にでもひかれてるように、

敷居しきいをこえ、階段かいだんをのぼったりおりたりして、ごろごろとうごきつづけました。そのうちとつぜん、ベッドがくるつとひっくりかえったかと思うと、いきなり若者の上に山のようにのしかかっ
てきました。けれども、若者もまけてはいません、ふとんやまくらをはねとばして、その下からぬけだしました。そうして、

「もう、だれがのるもんか。」

と、いいすてて、こんどはたき火のそばにねころぶと、夜のあけるまでねむりこんでしまいました。

あくる朝、王さまがやってきました。王さまは、若者わかものが床ゆかの上うへにねているのを見ますと、おばけのために殺ころされてしまったのだらうと思いました。それで、王さまは、

「りっぱな男なのに、おいしいことをしたものだ。」
と、いいました。

若者はこれをききますと、むっくりおきあがって、

「まだやられちやおりませんよ。」

と、もうしました。

王さまはびつくりしましたが、でも心のそこからよろこんで、
いったいどんなぬめにあったのだ、とたずねました。

「うまくいきましたよ。」

と、若者わかものはこたえていいました。

「これで、まずひと晩ばんはすんだわけですが、あとのふた晩もなんとかなるでしょう。」

若者が宿屋やどやの主人しゅじんのところへかえつてきますと、主人もびつくりして目をまんまるくしました。

「わたしや、あんたの生きた顔を二度と見ようとは思いませんでした。」

と、主人しゅじんはいいました。

「どうです、ぞつとすることですが、どんなことだかわかりましたかね。」

「だめさ。なにもかもむだだ。ああ、だれかおしえてくれる人はないかなあ。」

二日ぼんめの晩ばんも、若者わかものはその古いお城しろにでかけていきました。そして、たき火のそばにすわって、またいつものように、

「ああ、ぞつとしたいもんだ。」

と、口ぐせになっていることばをいいはじめました。

ま夜中よなかちかくになりますと、ガタガタ、ドンドンというものがしだしました。さいしよのうちはおだやかでしたが、それがだんだんはげしくなるのです。そのうちに、ちよつとしずかになりましたが、さいごにはものすごいさけび声とともに、人間のからだはんぶんが半分、えんとつをつきぬけて、若者の目のまえにおちてきました。

「おい。」

と、若者がどなりました。

「もう半分いるぞ。これじゃたりないじゃないか。」

すると、またもやあたりがさわがしくなつて、ドタバタ、ギャアギャアやったあげく、あとの半分もおちてきました。

「ちよつと待^まつてろよ、もうすこし火をおこしてやるからな。」と、若^{わかもの}者がいいました。

若者が火をふきおこして、ふりかえつてみますと、どうでしょう。さつきの半^{はんぶん}分^{ぶん}ずつのからだ^{からだ}が、いつのまにかつながつて、おそろしい男が若者の席^{せき}にがんばっているではありませんか。

「おい、じょうだんはよせ。そのこしかけはおれのだぞ。」と、若者はいいました。

すると、その男は若者をつきのけようとしましたが、若者もだまってはいません。しやにむにその男をおしのけて、またもとの

席にすわりました。と、こんどは、あとからあとから、たくさん人間がおちてきました。そいつらは死人しにんの骨ほねを九つと、されこうべをふたつもつてきて、金かねをかけて、九柱きゅうちゆうぎ戯ぎ（ボーリングにいたあそび）をはじめました。若者もやってみたくなくて、

「どうだね、おれもいれてくれないかい。」
と、たずねました。

「いいとも、金があるんならな。」

「金ならうんともつてるぜ。だが、その球たまはまんまるくないな。」
と、若者はこたえました。

そうして、若者はされこうべをとつて、旋盤せんばんにかけ、まるくけずりました。

「さあ、こんどは、ずっとよくころがるぜ。そうれ、うまくいく。」

と、若者はいいました。

それから、若者わかものはその男たちといっしよに九柱きゅうちゆうぎ戯ぎをやつて、金かねをすこしそんしました。ところが、十二時の鐘かねがなつたとたん、なにもかもが目のまえからきえてなくなつてしまいました。そこで若者は、ねころんで、ぐっすりとねむりました。

あくる朝、王さまがやってきて、ようすをきこうとしました。

「こんどは、どんなぐあいだったな。」

と、王さまがたずねました。

「九柱きゅうちゆうぎ戯ぎをやつて、銅貨どうかを二つ三つそんしました。」

と、若者わかものはこたえました。

「では、ぞつとしなかったのかね。」

「とんでもない、すっかりゆかいにあそんでしまいましたよ。ぞつとするつてのが、どんなことだか知りたいんですがねえ。」

と、若者がいいました。

三日めの晩ばんも、若者はまた旋盤せんばんにこしかけて、いかにも腹はらだたしそうに、

「ああ、なんとかしてぞつとしてみたいもんだ。」

と、いいました。

夜よがふけたころ、六人の大男が棺かんおけをひとつかつぎこんできました。すると、若者は、

「ははあ、これは、きつと二、三日まえに死んだおれのいとこだな。」

と、いいながら、指であいずして、よびかけました。

「おい、こつちへこいよ、こつちへこいよ。」

大男たちは棺かんを床ゆかにおろしました。若者わかものはそのそばへいって、ふたをとつてみました。すると、なかにはひとりの死人しにんがねていました。顔にさわつてみますと、まるで氷こおりのようにつめたいのです。

「待まつてなよ、いまちよつとあつたためてやるぜ。」

若者わかものはこういうと、火のそばへいって、じぶんの手をあたためてから、その手を死人の顔の上のせてやりました。けれども、

死人はあいかわらずつめたくて、ちつともあたたかくはなりません。そこで、若者は死人を棺かんからだして、火のそばへつれていきましました。そして、じぶんがそこにすわって、そのひぎに死人をのせました。そうして、血ちがめぐりだすように、死人の両りょう腕うでをこすってやりました。しかし、それでも、なんのききめもなさそうです。そのとき、ふと、

「ふたりでいっしょに寢床ねどこにねれば、おたがいにあつたまるものだ。」

と、思いつきましたので、死人をベッドのなかにねかして、ふとんをかけてやりました。それから、じぶんもいっしょにならんでベッドのなかにはいりました。

しばらくすると、死人もあたたまってきて、うごきだしました。

「そうれ、みろよ、あつためてやってよかつたろう。」

と、若者はいいました。

ところが、その死人しにんがむつくりとおきあがつて、

「やい、こんどは、きさまをしめ殺ころしてやるぞ。」

と、どなりました。

「なにつ、それがおまえの恩おんがえしか。さつさと棺かんおけのなかに

もどりやあがれ。」

若わかもの者はこういふといっしよに、死人をもちあげて、棺のなか

にほうりこみ、ふたをしてしまいました。すると、さつきの六人

の男がでてきて、またその棺をどこかへはこんでいきました。

「ぞつとしそうもないなあ。」

と、若者はいいました。

「ここにいたんじや、いっしょう一 生 がかつたつて、おぼえられやしな
い。」

そのとき、またひとりの男がはいってきました。その男はほかの
のだけよりも大きくて、みるからにおそろしい顔つきをしています。
もう年をとつていて、白い長いひげをはやしています。

「おい、小僧こぞう、ぞつとするつてのがどんなことか、いますぐおれ
がおしえてやる。きさまの命いのちはもらったからな。」
と、その男が大声にいいました。

「そうあつさりとやられてたまるか。おれだつてだまつちやいね

えぞ。」

と、若者がいいました。

「よし、ふんづかまえてくれるぞ。」

と、その怪物かいぶつがいいました。

「おつと、あわてなさんな。そんな大きな口をきくんじやねえよ。おれにだつて、おまえぐらいの力はあるんだぜ。いや、もつと強いかもしれねえ。」

「そのお手なみを見せてもらいたいもんだ。」
と、じいさんがいいました。

「もし、きさまがわしよりも強かったら、きさまをゆるしてやる。さあ、こつちへこい、力くらべだ。」

じいさんはくらい廊下ろうかをいくつもとおつて、かじ場ばの火のそばへ若者わかものをつれていきました。そして、そこにあつたおのをにぎつて、たつたひと打ちうちでかなしきを地面じめんのなかにめりこませてしまいました。

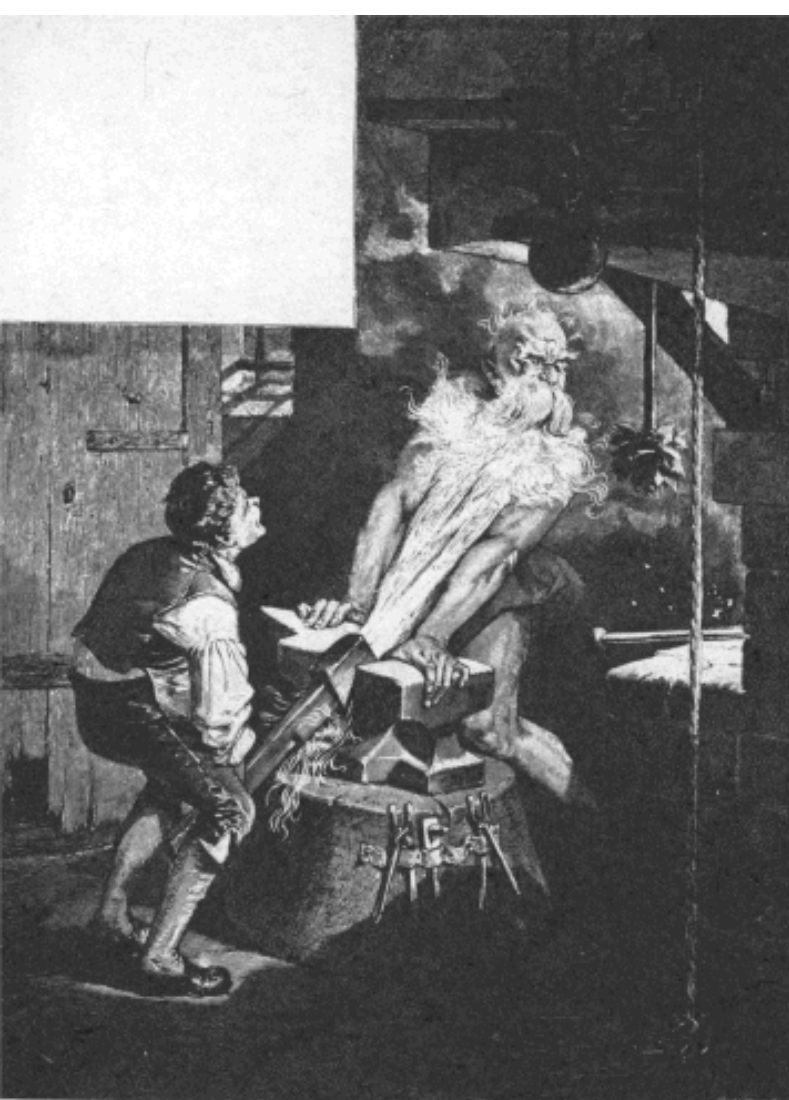
「そんなことなら、おれのほうがもつとうめえ。」

若者はこういつて、べつのかなしきのところへいきました。じいさんは見物けんぶつするつもりで、若者のそばにならんで立っています。白いひげは長くたれていました。そのとき、若者はおののにぎつて、ただひと打ちうちにかなしきをうちわり、じいさんのひげもそのわれめにいつしよにはさみこんでしまいました。

「さあ、どうだ、死ぬしのはおまえだぞ。」

と、若者はいいました。

それから、若者わかものは鉄てつの棒ぼうをつかんで、めちやめちやにじいさんをうちのめしました。さすがのじいさんも、とうとう泣なきだして、どうかうつのはもうやめてください、そのかわりお金かねをたくさんさしあげますから、としきりにたのみました。そこで若者はおのをひきぬいて、じいさんをはなしてやりました、すると、じいさんは若者をつれて、またもどのお城しろにもどり、地下室ちかしつにはいつて、金貨きんかのぎっしりつまつた三つの箱はこを見せました。そして、「このうちのひとつは貧乏人びんぼうにんに、もうひとつは王さまにあげますが、あとのひとつはあなたのものです。」と、いいました。



そうこうしているうちに、十二時の鐘かねがなりました。と、そのとたんに、ばけもののすがたがきえうせてしまい、若わか者ものはまっくらやみのなかに、ただひとりよりのこされました。

「なんとかぬけだせそうだぞ。」

若者はこういって、手さぐりしはじめました。そのうちに、ようやく道を見つけたしました。それから、もとのへやにもどって、またたき火のそばでねむりこんでしまいました。

つぎの朝になりますと、王さまがやってきて、

「ぞつとするとというのがどんなことか、こんどはおぼえたらうな。」

と、いいました。

「いいえ、とんでもございません。」

と、若者わかものはこたえていいました。

「死しんだわたしのいとこがまいりました。それから、長いひげをはやした男もまいりました。そいつは、地下室ちかしつでたくさんかねの金を見せてくれました。でも、ぞつとするとというのがどんなことかは、だれもおしえてはくれませんでした。」

それをきいて、王さまはいいました。

「おまえはこの城しろの魔法まほうをといってくれた。わしのむすめを、妻つまとしておまえにやるとしよう。」

「それはまことにありがたいことですが。」

と、若者わかものはこたえました。

「しかし、ぞつとするとというのがどんなことか、わたしにはいまもってわかりません。」

こうして、きんか金貨がちかしつ地下室からはこびだされて、ごこんれい婚礼の式があげられました。

わかい王さまは、おきさぎ妃さまをたいそうかわいがり、心からまんぞ満まんぞ足くしていました。けれども、あいもかわらず、

「ああ、ぞつとしたいものだ。ぞつとしたいものだ。」
と、口ぐせのようにいっていました。しまいには、お妃さまは、これをきくのが、いやでいやでたまらなくなりました。

ところが、おしじよ妃づきの侍女が、

「いいことがございます。あたくしが、ぞつとするとということを、

王さまにおしえてさしあげましょう。」

と、もうしました。

侍女は、お城の庭をながれている小川のところへでていきました。そして、おけにドジョウをいっぱいとってこさせました。夜になって、わかい王さまがねむっていますと、お妃さまは侍女にいわれたとおり、王さまのかけぶとんをそつとはいで、ドジョウのはいつているおけいっぱいをつめたい水を、王さまの頭からザアツとかけました。とたん、たくさんのドジョウが王さまのからだのまわりをピチャピチャはねまわりました。すると、王さまは目をさまして、さけびました。

「うわあ、ぞつとするわい。ぞつとするわい。これではじめてわ

かったよ、ぞつとするとということが。」

(1) なわ屋やのむすめと結けっ婚こんしたというのは、首くびつりの罰ばつをうけたことです。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

※表題は底本では、「こわいことを知りたくて」
旅《たび》にでかけた男の話」となっています。
[#改行]

入力：sogo

校正：チエロ

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こわいことを知りたくて旅にでかけた男の話

グリム Grimm

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 矢崎源九郎訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>